

## 自己評価報告書

平成23年 3月31日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520594

研究課題名（和文） 歴史における生活・生態史の連鎖と断絶—水辺集落の構成と展開—

研究課題名（英文） The Changes of Villager's Life and Behavior in Their History -The Structure and Development of Waterside Villages-

研究代表者

蔵持 重裕 (KURAMOCHI SHIGEHIRO)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：70153369

研究分野：日本中世史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：村落 生活史

## 1. 研究計画の概要

本研究は、日本の中世・近世を中心に、特に水辺集落に焦点をあてて、集落の連鎖と断絶、周辺集落との交流と対立の有様を追究することによって、その生活・生態の歴史的展開とその意味について明らかにすることを目的とする。

具体的には、滋賀県琵琶湖沿岸集落として、(1)長浜市西浅井町大浦・庄、(2)大津市小松、(3)京都府宇治市宇治川流域を、具体的な研究対象地域に設定した。基本的な研究方法は、各地域についての中世・近世史料の調査・蒐集・翻刻・分析の各作業、現地のフィールドワーク調査と、その調査成果などをもとに、研究課題を遂行していく研究会、という大きく二つの形態ですすめていく。

## 2. 研究の進捗状況

(1)大浦を含む旧西浅井町＝故大浦荘地域では大字大浦・庄の調査を進めた。大浦では浄土真宗の蓮敬寺で主として近世ではあるが蓮敬寺文書の調査を行い、全点の撮影を終了した。中世文書の写しも確認できた。同じく真宗の本照寺においても若干の史料を確認し調査した。これらの文書の存在は従来も知られていたが、近世の琵琶湖舟運関係の重要な史料である。また、お年寄りからの聞き取りでは戦前・戦後の琵琶湖漁業、水運の状況が明らかになった。漁業は日常的な生業であったが、舟運は林業・薪の販売が主流であるが、臨時の金銭収入を得ようとする不定期なものもあった。

庄では、殿村家文書の調査・撮影を目指したが所蔵者の都合で閲覧に至らなかった。しかし、菅浦阿弥陀寺の秋山富男氏が庄と山門

との山相論関係資料のコピーを所持されていて、これを撮影させていただいた。お年寄りからの聞き取りでは戦前期から現代に至る村の組織や年中行事などを聞き終えた。その中で小冊子、谷口卓三氏著『大字庄の歴史について』を手に入れることが出来たのは大きい成果であった。この書は庄の民俗誌である。また、黒山の石仏群の調査を始めたが天候が悪く、時間的余裕がなく中断している。

(2)については大津市小松での聞き取りと伊藤家文書の調査が進んだ。特に学会ではその存在が知られながらも所在が不明であった伊藤家文書を種徳寺で発見できたのは大きい成果であった。全点を撮影した。また、この過程で史料の保管について種徳寺より相談を受け、滋賀大学経済学部附属史料館を紹介し、伊藤家文書は滋賀大史料館に寄託された。これは史料の保全と公開という意味で前進した処置であった。

(3)は調査終了し、蔵持の論文が、立教大学名誉教授藤木久志氏編の関連する論文集『京郊圏の中世社会』（近刊予定）に「禅定寺領の山野と村人—村の境界と人々の生活—」と題して発表される。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

小松庄では所在不明であった伊藤家文書の発見が大きい。しかし、大浦・庄では新しい文書の発見にまでは至っていないが、地元の方々からの聞き取りは進み、戦前から高度成長前の農業・漁業・林業・舟運の状況が明らかになってきた。農業以外の第一次産業は、交易を不可欠としており、村は「商業村」の性格を持つことが改めて確認できた。これは

中世の生業でも言えることで、網野善彦氏がこれらの村を「都市」と呼んだ一面に符合しよう。作業は全体としては7割方達成していると言える。

#### 4. 今後の研究の推進方策

今後は小松庄での補足調査と、当初の予定ではなかったが「商業村」「交易村」としての海辺の村を参考に取り上げたいと考えている。具体的には長崎県対馬を考えている。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計1件)

(1) 蔵持重裕、高志書院、『京洛圏の中世研究』  
頁数 p74～100、2011年